

「差別を解消し、人権が尊重される三重をつくる条例」には「人権問題の多くは、社会構造の中で生じており、社会として解決していくことが必要である。私たち一人一人がその当事者であるとの認識の下、自他の人権を尊重し、不当な差別をはじめとする人権問題の解決に向けて取り組んでいかなければならない」とあります。

「人権問題の多くは、社会構造の中で生じている」「私たち一人一人がその当事者」とはどういうことなのでしょう。私たちの日常生活の一場面から考えてみましょう。

たまたま得られた優位性

自由に店を選ぶのは…

みなさんは「マジョリティ特権」という言葉を聞いたことがありますか。

車いすユーザーである愛さんは、飲食店に行くときは車いすで入れる店かどうかを確かめなければなりません。一方でひろ子さんは、自分が入れるかどうかを気にしなくても、入りたい店を選ぶことができます。それは、多くの店が多数派であるいわゆる「健常者」に合わせて作られているからです。ひろ子さんは、自分がたまたま「健常者」という多数派に属していることで、労なくして「自由に店を選ぶことができる」という優位性を得られているのです。このような多数派(マジョリティ)の優位性を「マジョリティ特権」といいます。

自動で開くドア・立ちはだかるドア

マジョリティ特権について、自動ドアに例えられることがあります。今の社会は、多数派に対して自動でドアが開いてくれるようなイメージです。一方で、少数派(マイノリティ)に対しては自動ではドアが開かず立ちはだかります。自力でこじ開けなければならないため、前に進むには相当の労力が必要となります。多数派は、自分に対してあまりにも自然にドアが開いてくれるので、ドアの存在すら意識せずに済み、自動でドアが開くことが「ふつう」「当たり前」だと思ってしまう。

マンガの中のひろ子さんは、車いすユーザーの愛さんの言葉から、自分がたまたま得られている優位性に気付くことができました。

少数派側からの視点

マジョリティにとっての「ふつう」や「当たり前」が前提となってしまう今の社会の中で、女性や障がい者、外国につながる人や性的少数者などの社会的マイノリティが、不利益を被ったり生きづらさを感じさせられたりしています。その事実気付くためには、ひろ子さんのように、共に過ごしたり話を聞いたりすることを通して、マイノリティ側からの視点に触れることが必要なのではないでしょうか。

